与那城では7月の主群のモードは120～130㎜にあるが，これは前年産である．この時には甲幅80～100㎜程度の当才早期群の加入がみられた．9月も主群のモードは120～130㎜であるが，これは当才群が成長したものであり，この月から漁獲対象の主体は当才群に移ったと考えられる．10～11月にはこの当才群のモードは140㎜前後になった．しかし12～1月には，120㎜以下の小型群が多くなった。これは6～8月の夏季生まれのものと考えられる．

石川では6～7月に主として漁獲されたのは甲幅モードが140～150㎜にある前年度産群だった。8月になると甲幅100㎜以上に達した当才ガニが漁獲されだし，9月にはこれが120㎜以上に成長し当才ガニの占める割合が高まる．この頃から漁獲される主体は前年産群から当才群へとかわるようだ．しかし他の3ケ所と比較してここでは甲幅150㎜以上の大型個体も多く，夏以降も前年産群が割と多く漁獲されたのが特徴的である（図18）．

以上4ケ所のタイワンガザミの漁獲サイズの変化からすると，①前年産群は7～8月まで漁獲の主体を占める。②3～4月生まれの当才早期群は7～8月に甲幅100㎜以上に達し漁獲されはじめ，それ以降当才群の加入が継続する。③8～9月になると当才群が漁獲の主体をなすようになる。　という漁獲対象の構成群の変化パターンが推定される．

4　成　　熟

沖縄市では5～7月の間は甲幅115～170㎜の前年度群が外抱卵をもつが，8月になると甲幅110㎜以上に達した当才群も抱卵するようになった。抱卵個体は10月まで出現したが，9月以降の抱卵個体は当才群が多く占めた．8～9月に抱卵する当才ガニは甲幅組成から考えて3～4月生まれの早期群で，それ以降に生まれたものは10月に抱卵するものがあるが，大部分は冬を越して翌年3月から産卵群に加わると考えられる．

勝連では5～7月に甲幅105～175㎜の前年産群の抱卵個体が出現した，8月になると甲幅105㎜以上の当才群が抱卵するようになる．しかし沖縄市と比較すると当才群の抱卵率は低く，冬を越した翌春以降産卵群に加わるものが多いようだ．9～10月の当才ガニの大きさをみると，勝連では甲幅120㎜を越えるものが沖縄市よりも少なく，勝連の当才ガニは早期群が少なかった．このため勝連で漁獲される当才ガニの産卵群への加入率が沖縄市のものより低かったのだろう．

与那城では7月に甲幅115～165㎜の抱卵個体が出現していたがこれは前年産群である．9月になると甲幅105㎜以上の当才群に抱卵するものがでてきた．ここでは勝連同様早期群以外の当才群の年内産卵は少なかった．

石川では6～8月に甲幅110～180㎜の前年産の抱卵個体が出現し，当才群の抱卵個体は9月になってからみられ，この時から抱卵ガニの主体は当才群となった．石川でも早期群以外の当才群の年内産卵群への加入は少なかった（図17）．

以上4ケ所の雌ガニの抱卵状況からすると，タイワンガザミは，3～4月頃生まれた早期群が年内（8～10月）に産卵群に加入するが，それ以降に生まれたものの大部分は翌春～夏に成熟して産卵群へ加わるものと考えられる．また抱卵個体の最小サイズは勝連で8月に漁獲された甲幅104.4㎜のものだったので性成熟するのは甲幅100㎜以上になってからだろう．

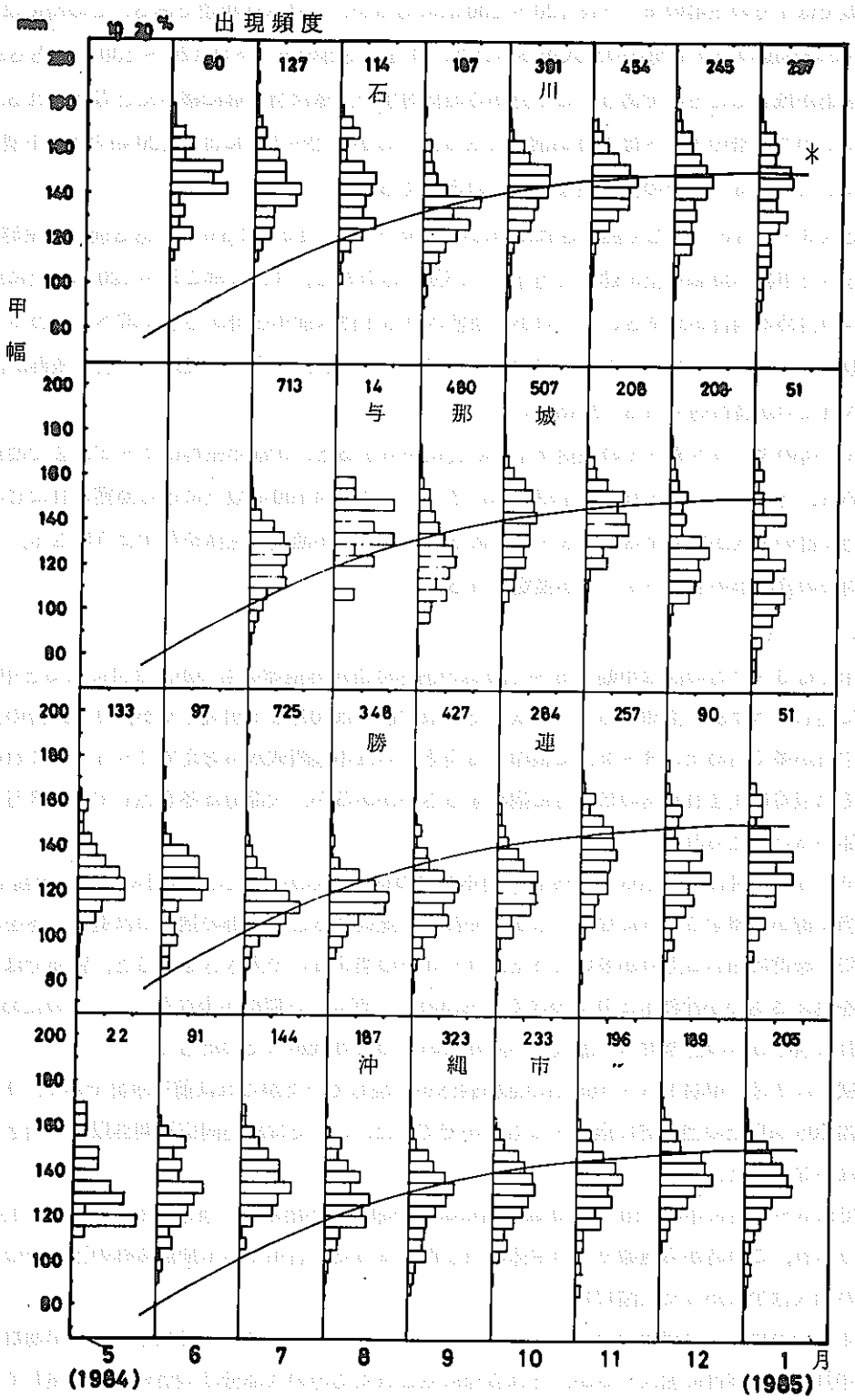

図18　各漁協に水揚げされたタイワンガサミの甲幅組成

＊ 島袋（1982）の飼育例から推定した3月生まれのタイワンガザミの成長

図中の数字は測定数